茜雲

野原みえ

朝食の支度をしていると、背後で物が落ちる重たい音がした。

ちひろは一時手を止め後を振り返った。デッキの上に布団が広がっている。

「あぁ……」

母親が溜息まじりの声でつぶやき、うんざりした顔つきで、自分のコップに朝一番の茶を入れた。

武夫が二階の窓から、庭のデッキへ向けて布団を投げ落としたのだ。

定年を間近に控えた武夫は、休みの土曜日あるいは日曜日に限って、自分の気分次第でこんなことをするようになった。

布団は自分のであったり、ちひろのであったり、その時々で違っていた。

それは月に一度のときもあれば、二度になることもある。

一度目は、干そうとして誤って落とした、と言い訳で済んだが、二度三度となるとそうもいかない。この家での武夫の立場が、どんなものであるかは、ちひろにも十分判っている。全ての権利はちひろにあるのだから。

武夫は五分、十分と心を静めた後、そろりそろりと階下へ下りてくる。

自分で落とした布団を一人で干すことになる。ちひろの機嫌を損なえば、この家で何年暮らしていようとも、夫婦の籍のない武夫には、居辛くなるのは当然のことだろう。

四十六歳の結城ちひろは、百坪少々のこの家に、自分の母親と、五十九歳の鈴木武夫と三人で暮らしている。近所には中規模の病院もあり、五分前後の近さにマーケット、ドラッグストアー、と毎日の買い物に不便はない。又、駅は十分以内の徒歩園だ。細身の武夫に比べ、自分の身体を持て余すようになったちひろと、歩くことが苦手な母親には最適な場所。結城家はこの辺りでもちょっとした豪邸である。十七年前に、癌で死んだ父親が残した家だ。父親は自分の余命を知った頃から、早急に財産の整理を始め、一軒の賃貸アパートと、多少の貯金を残した。その賃料で母親は生計を立てている。ちひろは役所に勤め

る公務員で、二人の生活はこれで何の不自由もない。

武夫と出会ったのは、ちひろが二十八歳で、まだ、人の視線が誇らしく思える頃であった。通勤電車内で、激しい腹痛に襲われたちひろを、わざわざ途中下車までして、病院へ付き添ってくれたのが武夫だった。

武夫はキザなことを、臆面もなく平気でするような男だった。ちひろの好きなタイプではなかったが、武夫の度重なる誘いに、言い訳も出尽くし、助けられたことへの弱みもあって、ちひろにとって、何の興味もない四十一歳の武夫と、ほとんど強引に付き会うようになった。けれど武夫は、既に家庭を持ち子供がいたが、ちひろは気付かなかった。と言うのも、この男がちひろにとって、結婚の対象外だったからだ。

ちひろには双子の妹達がいるが、二人とも結婚し家を出ていた。その後父親を亡くし、母親と二人きりになって、広い家の中は、がらんとした静けさで、寂しさがいっそう心身に染みていた。そんな折、気づけば武夫は、空いた席に着くように、結城家に入り込んでいたのだった。

武夫のキザな態度は、結城家に入りすっかり影を潜めた。ちひろの男の好みが判ったからだ。そんな彼女が、どうしてこんな男と暮らすようになったのか？　ちひろは自分でも、理由を挙げて説明することができない。いつの間にかこうなった。今でもキザな男は嫌いだ。けれど、武夫の半分は好きだと思う。だから、僅かなことで嫌いな方へ気持ちが傾く。喧嘩の後、過去の武夫を思い出し、顔を見るのも側にいるのも思いっきり嫌になる。けれど又、いつの間にかそのことを忘れてしまう。それの繰り返しで十六年経った。

武夫はちひろから「武夫」と呼び捨てにされることを喜んだ。若さの象徴のような、十三歳もの年令の差を自分のものにして、心が浮き立つような喜びを味わっていたのだった。それでも年を重ね、この家での弱い立場の武夫が、ちひろから呼ばれる度に、この家にとってもちひろにとっても、もうどれほどの価値も持たない無用の長物、のように思われてならないのだった。

ちひろの妹達からも、兄さんとは呼ばれない。

いつも呼び名は、武夫さん。それも親しみのない冷たい響きで。武夫はそれが堪らなく嫌だ。そのことをちひろに愚痴ったことがあった。するとちひろは事も無げに言い放った。

「いいじゃあないの。おじさんと呼ばれないだけでも」

そう言われてしまえば、武夫も、それは仕方がないことだと判っている。十六年の歳月を味方に付けたとしても。妹達が嫁いだ後、ちひろと知合いこの家に入り込んだ身分。武夫も内心では判っていることだが、やはり寂しさは拭えない。

武夫と暮らすようになってから、ちひろは徐々に空気を吹き込んでいく風船のように、ふっくらとした体形になってしまった。座るとぽってりとした大黒様のようだ、と自分でも思っている。気を抜いて座れば、大きな乳房がウエストを隠し、すぐ膝の上にある。双子の妹達もちひろと同じ体形だ。母親似だと姉妹で愚痴っている。

しかし母親の自慢は、自分の若い頃の写真。

面長の顔にスラリとした、細身の女がそこに写っている。七十二歳の今の母親からは、想像しがたいほどの変わりようである。

ちひろはどう足掻いても、自分の老後の姿が、そっくりここにいることを、証明しているようで憂鬱だった。

母親が、写真の中にいる若い頃が自慢のように、ちひろは、今の体形にしては、形の良い細い足が気に入っている。けれど、細い二の足は、重い体形を支えるのには、相当負担になっていて、一日が終る頃には足全体が悲鳴をあげた。

「武夫さんもこの家にきてから、どのくらいになりますか？　もう随分になりますよね。僕とでも、早や三年、ですか？　ちひろさんとはかなり長いでしょ。……武夫さんみたいな人が、不思議ですなあ」

庭のデッキの端に腰掛けた健二は、百八十センチ以上もある、長身の武夫を見上げながら言った。

健二はこの家の近所に住み、ちひろとの面識はあったものの、道で出会えば挨拶を交わすくらいなことで、立ち話をするほどの付き合いはなかった。武夫が公民館の、盆栽の講習会で知合い、家に来るようになった。盆栽の先輩だ。

ちひろは健二の声を聞きながら、台所でお茶の用意をしていた。

健二の話に、武夫は盆栽の掃除をしながら聞き返した。

「ええ、どう言うことですか？」

武夫は不用意に言った。

「いえね、人は好き好きというか、僕にはわかりませんがね」
健二は笑みを浮かべた顔で、奥の台所にいるちひろのふっくらした後姿を、ちらっと盗み見る。
「はあ？」
武夫は健二の言葉を判断しかねていた。
「つまり、蓼喰う虫も何とか、ということですかね。おっと、これは失礼」
健二は声を潜めて言うと、軽く笑った。
「あ、ああ、まあ……」
ここまで言われて、武夫はやっと言葉の意味を理解し、苦笑を滲ませる。
ちひろは途中から、健二の意味ありげな言い方に、何を言おうとしているのかを、はっきりと意識した。茶を入れかけた手を止めて、二人の会話を粗方きいていた。二人はその後、ぼそぼそと話して笑い合った。
ちひろは茶をさっと入れ、〃今日はお菓子はなしよ〃　と心の中で言い、黙って縁側に茶を置くとさっさと掃除を始めた。
「ちひろちゃん、今日はお菓子はなし？」
武夫がちひろに向かって声を張り上げた。だが、ちひろは掃除機の音を響かせている。

「お母さん悪いけど、私、今日は料理する気分じゃないの。外に出ます？　それとも出前とりますか？」
土曜日の晩は、ちひろが料理の腕をふるい、一週間で一番のご馳走の日にあたる。
「ええ？　どうしたのよ、ちひろ。私、楽しみにしてるのに」
母親が恨めしそうな顔でちひろに言った。
「うん……ごめんなさい。今日は気分がのらないのよ」
「そう、何かあった？　……まあ、いいわ。今日は出前にしましょ」
母親はちひろの不機嫌な様子に、多くは聞かず、今から外出する煩わしさもあり、あっさりと出前をとることに賛成した。
「ぼくも、それでいいよ」
武夫がちひろの気持を他所に、呑気な声をだす。
その途端、ちひろが強い調子で言った。
「あなたは、たまにはあちらのお宅で召し上がってらっしゃればいいでしょ。明日は

日曜日でもあることだし、そうして下さい」
ちひろはいつも言わない言葉をきっぱりと言い、きつく口を結んだ。
武夫は、見たこともないちひろの態度に、言葉がみつからない。その言葉が何を示しているのかも、武夫には到底わかっていなかった。
一瞬の沈黙のあと、母親が口をだす。
「ちひろ、何を言ってるの。そんなこと言うものじゃないわ。一緒に食べましょ。ごめんなさいね武夫さん」
ちひろの気持を理解できずに、武夫に謝った。
「あ、い、いいんです。僕は、外でしますので」
武夫は言って、愛想笑いをする。そして、ちひろの様子を窺った。
それでもちひろは黙っていた。
ちひろは自分でも判っている。どれほど、子供じみた意地悪をしていることくらい。それでも、せずにはいられない。昼間のことは許せない、と思っている。
武夫は何も判らず、ちひろを刺激しないほうが、この際、得策と判断したようだ。
「じゃ、行ってきます。すぐ戻りますので」と言った。
こんな時、ちひろの言葉どおりに、本宅に戻れる武夫ではなかった。土曜日に行っても、予定のない帰宅は、喜ばれるものではないことくらい、武夫は十分承知している。もっと惨めな気持になるだろうと。武夫は自分の寄る辺ない身を思った。ぐずぐずと部屋を出ていく。
（何よ、私が知らないとでも思っていたの。これまで何も相談なしで、勝手にあちらに帰っているじゃないの）ちひろは胸の内でつぶやき、冷やかな気持ちで見送った。

武夫は服を着分けしている。こちらとあちらの家という風に。ちひろは武夫のすることは、全て知っていると思っている。
武夫は日曜日の朝、決まったようにこう言った。
「ちょっと、散歩に行って来る」
武夫の格好は、散歩にしてはいかにも不似合いな服装だ。背広にカバンといった通勤時と同じなのだから。ちひろは始め腑に落ちず「変よ、その服装。散歩でしょ？」などと突っ込みを入れたものだ。その時の武夫の困った顔を、ちひろは今でも昨日のように思い出すことができる。近頃は武夫も堂々と散歩、と言い放ってさっさっと出かけていく。二年

過ぎた頃から、武夫の外泊は月に一度になった。
給料日を境に、決まったように一泊。武夫は会社では役職に就き、それなりの報酬はあった。けれど、給料は、武夫が家を出た時から妻のものになった。
武夫はこれまでと同じように、自分のわずかな小遣いと、諸経費のみを受け取っている。会社では部下との付き合いもあり、充分な額とはいえないだろうが、これが武夫の全てだ。どんなに困ろうとも、それは妻のせいではない。ならば、家族の元に戻れば良いだけのことだ。武夫にもそのことは判っている。不満を言える立場ではないと。だから黙って、妻から渡される分のみを受け取るだけだ。
時にして武夫は、何も言わない妻が、寛大な女とさえ思えるのだった。

武夫がもうすっかりこの家に馴染んだ頃に、ちひろは何気なく武夫に訊いたことがあった。
「ね、あちらは、何も言わないの？」
妻が何も言わない訳がないと、判ってはいるが、余りにも穏やかな日々が続いていると、まるで、始めからまともに正妻であったような、錯覚に落ち込んでしまいそうだった。
武夫は一時あって、ぼそっと言った。
「今は何も……」
「そう……じゃ、以前は言われたんだ」
判りきったことを訊いてしまったと思った。
「まあ、多少は」
そりゃあ、そうだろう、多少どころではないはずだ、とちひろは思った。
武夫は髪の毛を長い指でかきあげ、軽く頭上を押える。これが武夫のいつもの癖だ。
「俺の、性格を解っているから……」
自分の分身でもあるかのような言い草に、ちひろは自分を否定され、君とは違う、とでも言われたような、にわかに嫉妬心が湧きあがった。妻が諦めたとでも思っているのか、女はそんなに単純ではないのよ。ちひろは武夫の年齢にしては、黒いふさふさの髪の毛から、高い鼻筋の通った横顔に目をやった。武夫はちひろの前にも、他の女とさんざんあったようだ。この年齢になっても、どちらにも区切りをつけることも出来ず、行ったり来たりの生活を送っている。
ちひろも、これ以上の関係になろうとも、この頃はもう思っていない。

立場上、籍のことで武夫に強く迫ったこともなく、妻のことを、あれこれ詮索したこともない。ちひろにとって生活の不便は今のところ、何もないのだから。これまで相手の妻の立場など、思いやったことも、気にしたこともなかった。武夫にとっても、ちひろは都合のよい女であるに違いない。大きな家に住み、毎日の食事はちひろの母親が、それなりに年期の入った料理を食べさせてくれる。ゆるゆるとした生活が続いている。尖がった何かがないかぎり、武夫の態度は何も変わりそうもない。

そういえばと、ちひろは思い出した。

武夫と暮らしだして間もない頃だった。庭先の植木の向こう側の通りを、ゆっくりと行ったり来たりして、時折こちらを覗き見している人がいた。庭にちひろが出て行った途端、捜していた家が見つかった、とでもいうような様子で、そそくさとたち去った。あの人が武夫の妻だったのか？　細身の品の良い女性だった。

ちひろは時々その人を、武夫の向こうに重ね合わせてみる。そんな時、身体の奥でわずかに波立つものを感じるのだった。

武夫が自宅に戻っている。

それもこの頃では、二人の暗黙の了解になっていた。ちひろだって始めからそうだった訳ではない。

自宅にそれほど戻りたければ、ずっとそうすればいいじゃない。私が一緒に暮らしてと、頼んだ訳でもないのに。自分から勝手にまるで、人の膝にそろりそろりと上がってくる、猫みたいに入り込んで来たくせに。人の顔色ばかり気にする、それでいて、都合よく外に出歩く猫みたい。〝あなたは猫だわ〟

心の中で憤慨してみても、口に出すことはできない。それっきりになってしまえば、どうなるんだろう……。

武夫との別れを思うのは、ちひろにとって辛いことだ。

父親の逝った後の、ぽっかりと空いた淋しさを埋めるように、入り込んできた武夫を許したのもちひろ。

妹達は二人して子供を連れ、頻繁に実家へ戻ってくる。

佳奈が言う。

「ちいちゃんは呑気で甘えん坊だから、こんなことになったのよ。あの人の優柔不断さが判ってないの？　それで、よく公務員が勤められるわ。その内、老後の面倒をちいちゃん

一人で看ることになるわよ。お母さんとあの人と、二人をよ。大丈夫なんでしょうね？
私は子供たちのことで手一杯ですからね」
由香も慌てて付け加えた。
「わたし、私だって同じだわ。武夫さんのことは、いやよ……。お母さんだけなら、何とか、手伝えるかもしれないけど……」
由香は視線を落とし、しりすぼみに言った。
「よく言うわね。これまで、あなた達に、私が何か頼んだことがある？　何もないでしょ。これからも同じよ。心配ご無用よ。安心して自分の家族の心配でもしなさい！」
ちひろは二人の冷たい言葉を聞き、うんざりした顔を妹達に向けたのだった。
これから先、どんなことが起ころうとも、妹達に頼るつもりは毛頭ない。
この十数年、母親と武夫の間にたち、少しずつ心構えを強くしてきた。準備はもう出来ている。そのことだけは、自分に自信をもって言えることだった。

武夫が一人外で食事をすませて戻ってくる。「ただいま」の一言を誰に言うでもなく言って、居心地悪そうにリビングのソファーに座った。
「武夫さん、お茶でもどうですか」
すぐさま母親が茶を入れて持ってくる。
「あ、どうも……」
ちひろはそんな二人をよそ目に、素知らぬ顔でテレビを観ていた。何も言わない武夫を見ていると、また昼間の健二とのやりとりを思い出した。
私がどうしてこれほどの身体になったのか、子供を産まなかったからよ。女ですもの、ホルモンのバランスが崩れるに決まってるでしょ。そう武夫に言いたかった。正しい知識であるかないかは、そのことはどうでもよかった。武夫がどれだけ親しい間柄といっても、他人の健二にあれだけのことを言われて、黙って笑っていることが許せない。
しかも、武夫自身も侮辱されたというのに。二人でこそこそ笑っているとは。言った健二よりも、武夫の神経の鈍さに腹が立った。
子供を産まなかったのは、武夫のせいではない。自分がそう決めたのだ。何十年一緒に暮らしていようとも、不倫の事実に変わりはない。自分の立場を弁えてのこと。ちひろのプライドでもある。あなたの世話にはなってない。そのことが、ちひろの大きな支えになっている。

すねて二階に上がったちひろの後を、武夫が母親に気兼ねするように、少し間をおいて階段を上がっていった。

母親は自分の茶を入れ、テレビの前に座る。さほど面白くもない番組を一人で観ていたが、それにも飽きてテレビを消し、「さあ、そろそろ寝ましょうか」と独り言を言って立ち上がった。そこへ、ちひろが足音高く階段を下りてきた。

「お母さん、昨日武夫が買ってきたシュークリーム、まだ残ってたでしょ？」

「ああ、そうね。後、何個だっけ？　あるわよ」

「あ、そう。それ、いただくわ」

「あら、今から食べるの？　こんな時間に。また肥るわよ」

ちひろの丸い身体をみて言う。

「いいの。武夫がいいって言うから。二人で食べるのよ」

ちひろは母親を上目使いにみ、チッイと肩をすくめて悪戯っぽく微笑む。

「あらまあ、そうですか。どうぞご勝手に」

母親がちひろの無邪気とも、例えようのなさに呆れていると、武夫が二階から下りてくる。

「お母さん、すみません」

武夫が気まずそうに言った。

「あら、いいえ。どうぞどうぞ。あなたも大変ねぇ」

「いえ……」と苦笑して、武夫は頭をかいた。

「何よ、お母さんたら。お母さんも食べる？」

「いらないわ、こんな遅くに。胃がもたれて寝られやしない」

「あら、そう。じゃおやすみなさい」

「はいはい、休ませていただきます」

母親は二人をリビングに残して、さっさっと自分の部屋に引き上げていく。

ちひろはその晩、こんな夢を見た。

前方へ伸びる一本道を、赤ん坊を抱いて歩いていた。道の両際には、秋日に照らされた稲穂が並んでいる。真っ直ぐな稲穂をよく見ると、かすかすの実を結ばない稲穂ばかりだった。その稲田はずっと先まで続いている。辺りを見渡しても、人の気配もない。赤ん坊

を抱いたちひろがただ一人、秋の高い空の下を歩いていた。
少し歩いては立ち止まり、辺りを見渡して、誰かの気配を感じようとしていた。心細さに、腕に抱いた赤ん坊をしっかりと抱きしめると、子は腕の間を砂のようにさらさらに溶け、滑り落ちて、道上に盛り上がり小さな山を作った。
驚愕しているちひろを目掛けて、一陣の風が吹きぬけた。小さな砂の山は、一瞬にして風にさらわれてしまった。ちひろは、取り返しのつかないことをしたように思われて、大きな声で叫んでいた。
「赤ちゃんを返してー、私の赤ちゃんを返してー」
不意にちひろの目には、ゆらゆら湧き出る泉のように、熱い涙が溢れでた。
頬を伝う涙がぽとりと落ちて、かさかさに乾いた土地に吸い込まれていく。
ちひろは額にぐっしょりと汗をかいて目が覚めた。
頭元の時計を見ると、まだ五時三十分を針はさしている。
ぐったりと疲れた身体をベッドの上に起こして、横を見ると、まだ武夫は軽い鼾をかいている。ちひろは武夫の寝顔を暫く見ていたけれど、ベッドを下りて、何キロも歩いたような重たい足で窓まで行き、カーテンを開け窓をひらいた。
わずかにひんやりとした風が、緩やかに部屋の中へ流れこむ。汗ばんだ身体に心地良かった。
外はまだ、昨夜の闇の墨がうっすらと残り、夜明けは始まったばかり。
いつものちひろは、明けきらない朝の気配が好きだった。朝の喧噪が始まる前の、清々しい空気を吸い込むと、身体の隅々まで清められる気がしていた。
けれど、今朝は違っている。たまらなく、寂しい気持ちになった。仄暗い明かりの中で、一人佇む自分がいる。ぼんやりとした不安が、ちひろの胸の底に沈んで行くようだった。
自分の責任で武夫との暮らしを選んだ。家族という形の整った生活ではない。そんな自分の人生で、子供と、どう向き合うことが出きるのか？　子供といえども、しっかりと一人の人間を説得し、立派に一人前に育て上げる自信は到底なかった。
今にして思えば、武夫の妻への配慮も、僅かに、心の中になかったとは言えない。
子供は産まない、と自然に心は決まっていた。なのに、こんな夢を見るなんて……。
自分の中に子供への執着などない、と思っていた。予想もしなかった感情に、とんでもない忘れ物をして来たような、愕然とする。
「今更、なんなの……」

ちひろは自分を叱った。

その日、勤務中に母親から電話が掛かってきた。

これまでちひろの職場へ、母親が電話を掛けてくることは一度もなかった。

いつもの声とは違う母親の言葉に、ちひろは息を詰めて粗方の話を聴き、取り掛かった書類を片付け、上司に家で緊急な用事が出来たこと、年老いた母親では心配なことを手短に話して、早退願を申しでた。公務員として、職場に知られては困る身の上、十六年間内緒の相手、武夫が倒れたのだ。

今朝、珍しく支度の遅い武夫を残して、先に家を出たことをちひろは後悔した。

母親は、武夫を自分の家から離れた病院へ、搬送する余裕などなかったようだ。この家の目と鼻の先の病院で、後でちひろが辛い思いをすることなど、このときの母親には思いも及ばなかったのだろう。ちひろが病院へ着いた時には、母親が玄関先のロビーでちひろが来るのを待っていた。

武夫の妻から、〃この後の事は、妻の私が引き取るので、一切構わないでくれるように〃 ときつく言い渡され、追い返されたというのだ。

母親がちひろに知らせた後、少しの躊躇はあったものの、武夫の妻へも知らせたという。妻はタクシーで、ちひろより先に病院へ駆けつけていたのだった。

ちひろは病室の側にも行けずに、そのまま母親に促されて家路に着いた。

家に戻っても何も手につかず、掛かって来るはずもない電話を見つめて、一日を過ごした。

二階に上がれば、武夫の病院が数軒先に見える。大病院ではないが、設備の整った評判の良い病院だ。一刻を争うことであれば、この病院へ運ぶのは当然のこと。けれど、見える近さにあっても傍に行けないもどかしさに、ちひろは、悲しさと惨めな気持ちに今更にして苦しんでいた。

そんなちひろを見ていた母親が、つい言葉に出してしまった。

「全く武夫さんも、中途半端な男だよ。あちらにもこちらにもいい顔をしてるから、最後にはこんなことになるんだよ。身から出た錆だわ。本当に哀れな男だね」

「お母さん！　なんてひどいこと言うのよ。そんな言い草はないでしょ、あんまりだわ！」

ちひろは母親を睨みつけて、胸に詰まった固まりを吐き出すように言う。

「ひどいもんかね、ちひろ。あんたも悪いんだよ、嫌だいやだと言うかと思えば、又いつの間にか甘やかしてるから、こんなことになったんだよ。四十も過ぎて一人になるなんて」
「お母さんだって、黙ってこれまで付き合って来たじゃないの！」
ちひろの言葉が荒くなる。
「ま、よく言うねぇ、どれだけ心配してきたか。何を言っても、聞く耳を持たなかったじゃない」
それを言われてしまえば、ちひろは一言もない。あの頃、武夫の優しさばかりが嬉しくて、父の死を乗り越えられた。
「……武夫だって、肩身の狭い思いをして来たんだから」
「まあちひろ、あんたは相変わらずお人好しだね。すぐにそうやって肩を持つんだから。だから一人ぼっちになるんだよ。あちらに勝手にされて、一言もなしだよ。こちらは十六年も一緒だったというのに、籍も入れてくれない薄情者だよ。自分の食費だけを入れて、あんたに何一つ買ってくれたことなんてないじゃないか。武夫さんがこの家に何をしてくれたと言うんだよ。勝手に入り込んでおきながら、黙って出て行くんだから」
「仕方がないじゃない。あんなことになったんだから……庭のデッキだって直してくれたし、芝刈りだって庭木の剪定だって、武夫ばかりだったわ。それに、私はねお母さん、初めから覚悟してこうなったのよ。だから、これまで黙って来たじゃない」
ちひろは自分の言葉に胸がつまり、涙声になった。
「まあ、ちひろ、それだけのことじゃない。……馬鹿だよ。脳出血で口も利けずに、ありがとうの一言もなしで……。本当にこの子は馬鹿な子だよ。もう、私は何も言うことがないよ、本当に馬鹿な子だよ」
「もう、ばか馬鹿ばっかり言わないでよ……。何を言っても、もうあの人はいないんだから……」
ちひろはテーブルに両肘をついて、手の平で顔を覆い、溢れ出た涙をチッシュで拭いながら嗚咽する。
「私だって……大切な娘をこんな目に合わされて、憎らしいじゃないか。だからつい、ちひろに当たってしまって……ごめんよ」
「もう！　お母さんたら」
ちひろは顔を覆っていた手を、母親に向けてしゃくった。

「あんな男、早く忘れてしまいなさい。本当にあんな男……」
これまで、こんなちひろは始めてだった。母親はそれっきり黙ってうつむいた。
ひとしきり泣いた後、ちひろはきっぱりと顔を上げ、両手をテーブルの上に揃えて言った。
「ああ、もう、止めましょ。これで終わり。もう終わりよ。これからはお母さんと二人よ」
ちひろはふーっ、と大きく胸の底から息を吐き出し、自分に言い聞かせるように言う。
「そうだね……これでご破算にしてあげる、と言う訳にはいかないけど。あの人があんなことになってしまっては、どうしょうもない」
母親は黙って自分の手を見つめていたが、深い溜息をつくと、ちひろを見つめて言った。
「年増の女が二人で、仲良く暮していきましょうかね」
「何よお母さん！　年増が二人なんて。自分と一緒にしないでよ。私はまだ四十代ですからね。まだ花は咲きますよ」
「まあ、何だね。今泣いたかと思えば、変わり身の早い子だよ」
「そうよ、お母さんの子ですから。くよくよしたって、何も始まらないわ」
「おやまあ、よく言うね。でも、そうだね。それにしても、そう言う処は私似だわ……。本当に良かった」
母親はすっと息を抜いて、安堵したように頷いた。

ちひろの手元には、武夫の為に貯金した通帳が残る。
武夫と暮しだして四年目から、武夫には内緒で毎月、武夫が入れるお金を全て貯金して、もう十二年になる。七百万余りの大金だ。根無し草のような武夫を思い遣り、ちひろが勝手に蓄えたもの。今、武夫がこの家から消えて、ちひろの愛だけが通帳の中に残された。
「どうすればいいの、これ……」
ちひろは通帳に印字された年月を手でなぞりながら、武夫との生活が一つひとつ思い出された。
身体の自由を失った武夫が、浮遊物のように、妻と息子の元に戻った。共に暮したこの家から、互いに視線を合わせることも、言葉を交わすこともなく去って行った。十六年の歳月が、まるであっと言う間の出来事のように……。

ちひろは武夫の病室のある階まで、エレベーターで上がって行くが、その階では降りず又下へと戻る。それを何度か繰り返して気持ちを収めた。
病院の外に出て空を眺めると、青空が目に染みるようだった。ちひろの胸を覆っていた灰雲が、真昼の青空に少しずつ溶け込んでゆく。
「武夫、さようなら。私、とても幸せでした。ありがとう」
ちひろは病室のある窓に向け、声に出していった。

武夫との別れを、あれほど不安に感じていたちひろは、今はもういない。武夫が出て行って、まだ二ヶ月足らずと言うのに。
十六年の歳月がそうさせたのか、この数年、自分の気持ちを少しずつ整理してきたことは確かだった。
むしろ、諦めきれずに、武夫の帰りを待ち続ける妻に同情したのか、ちひろにも自分の気持ちがはっきりとはわからない。冷めた自分がいることに、些かの戸惑いを覚えていた。自分は、〝冷たい女〟と思えてならなかった。
「ちひろ、何だかさっぱりした顔してるけど、武夫さんのこと、吹っ切れたようだね」
「ええ、もうすっかり」
もうすかっり？　本当？　ちひろは自分の声の明るさに驚き、自問する。
確かに心の痛みも、胸の苦しさも、今は薄れて軽い声になった。でも、もう少し、もう少し時が過ぎれば、雨が全てを洗い流し、晴天が現れるように、昔の私に戻れるわ。ちひろはもう一度繰り返した、ゆっくりと。
「ええ、もうすっかり」
「そう良かった。……これからは親子で、誰に、遠慮もいらないね」
「あら、お母さん、あの人に遠慮してたの？」
「そりゃあ、そうだよ。家の中に男が一人いるだけで、何ていうか、こう素でいられないじゃないか」
「へえー、お母さんでもそんなこと、思ってたの？」
「当り前でしょ！　私だってまだ七十二歳だよ。男の前で、ばあさんでいられるはずがないだろう」
「まあまあ、それはどうも。お母さんもまだ女ね」
「馬鹿だね、この子は。女は何歳になっても女なんだよ。年を取れば女でなくなる、とで

も思っている人が多くて困っちゃうよ、本当に。まして他人の前では、しゃんとしなくちゃいけないよ」
「ごめんなさい。そうね、そうよね。私だってまだ四十六歳、これからよね」
そう言ってちひろは、ふふふと笑う。
「そうだよ」
「そうよね。ダイエットでもしようかしら」
「さあね。ちひろに出来るかしらね。まあ、やってみて損はないからね。楽しみにしてるよ。どんな美形になるか？」
「わかったわ。お母さん楽しみにしててちょうだい。今に唸らしてみせるから」
「おお！」
母親がおどけた顔でちひろを見つめ、二人で笑い合った。
誰に遠慮もいらない。新しい結城ちひろで生きていこう。
ちひろはそう思っている。
「明日もいい天気になりそうだねぇ」
母親が、窓越しに見える茜雲を眺めてつぶやいた。